

皆様こんにちは、山口県教職員団体連合会委員長の島村暢之です。

早いもので、もう 12 月。あっという間に 2 学期末を迎えました。会員の皆様におかれましては、評価等のためにお忙しい時期をお迎えのことと思います。県教連事務局においては、11 月に給与確定交渉という大きな山場を越え、ホッと一息ついているところでしたが…退職手当に関して追加提示があり、12 月末日に交渉する予定です。

さて、11 月 26 日に富山県で開催された教育シンポジウム（主催：日本教育文化研究所）に参加してきました。このシンポジウムは、将来を生きる子供たちが自らの力で未来を切り拓いていくにはどのような力が必要なのか、また教員はその力をどのように身に付けさせれば良いか等についてパネリストの方々に議論していただき、参加者もその議論を通して自らの実践について振り返り、今後の教育について考えることを目的としています。

この度は、パネリストに以下の 3 名の方々を迎えました。

松本 謙一 氏（金沢大学教授）

伊藤 真波 氏（日本初義手の看護師、北京・ロンドンパラリンピック競泳日本代表）

合田 哲雄 氏（内閣官房人生 100 年時代構想推進室内閣参事官・（併）文部科学省大臣官房付）

また、コーディネーターは、野原 明 氏（日本教育文化研究所所長、教育ジャーナリスト・文化学園大学名誉教授）が務められました。

シンポジウムの中で、3 名のパネリストは次のように述べられました。

【松本氏】「子供には学びの中から自己を見つめ、さらに深く考える力が備わっている。教員は、その力を発揮できる環境を整え、勇気づけ励ますことが大切だ。」

【伊藤氏】「先生は、子供たちの味方であってほしい。私自身、中学生時代にドロップアウトしそうになった時、寄り添う言葉がけを繰り返してくれた恩師のおかげで救われた。」

【合田氏】「日本の初等中等教育は、世界に誇れるものである。現場の先生方は、自信をもって今の教育を進めてほしい。」

その他にも、今後教壇に立つときに大切にしたい多くの言葉が語られましたのですが、シンポジウムを通じて、一番心に残った言葉は、次に挙げる伊藤氏の言葉です。

「できない理由、諦める理由を作ることは簡単。しかし、それで本当によいのでしょうか。」

伊藤氏は、看護学校在籍時に交通事故で右腕を失ったのですが、当時周りの方々からは「その状態で授業や実習を受けるのは難しい。」や「義手で看護師になるなんて前例がない。」等、看護師になることを諦めることを勧める言葉が多数あったそうです。しかし、夢を諦めたくない、そして何より障害に負けたくないという思いから、看護学校に復帰されたそうです。実際、看護学校復帰後、数多くの苦労をされたのですが、御自身の頑張りと同僚や看護学校の教員の支えにより、前例がないと言われた義手の看護師とられたわけです。

この言葉、そしてエピソードを聞き、私自身の教員生活そして、専従生活を振り返ると、今までどれだけできない理由や諦める理由を自分で作ってきたことかと反省するばかりです。今、県教連は会員数の減少により大きな岐路に立っていると云わざるを得ません。しかし、このような時であるからこそ、できない理由ではなく、何ができるのかを常に考えて行動していきたいと思います。

最後になりましたが、寒い時期となりました。風邪等を召されませんように、御自愛ください。

平成 29 年 12 月

山口県教職員団体連合会（県教連）

委員長 島 村 暢 之